サキタハヂメ／咲くやこの花インタビューvol.5

サキタハヂメ（さきた・はぢめ）【平成 16 年度　大衆芸能部門[のこぎり音楽]】

2016 年 12 月 4 日（日） 京都のカトリック聖ヴィアトール北白川教会で、聖堂に響く天使の調べ「歌うのこぎり」 サキタハヂメミュージカルソーコンサートを開催するサキタハヂメさん。今秋 NHK のドキュメント番組で、近年力を注ぐ「山を鳴らすプロジェクト」が紹介されるなど、多彩な分野で注目を集めるのこぎり奏者であり作曲家です。のこぎり演奏の祭典を日本で初めて開くなど、ユニークで独創的な歩みはどのように形作られたのか。インタビューでは幼少期のエピソードから時代を超えた壮大な夢にまで迫ります。
「こっちのドアが行き止まりでも、別のドアの先には道が続いている」「楽しくない日がない」と軽やかに笑うサキタさん。彼の思考の一端に触れると、心に抱くワクワクの種を芽吹かせたくなるかもしれません。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「音楽では芸術性プラス、笑かしたいと思う性分です（笑）」（サキタ）

2004 年、日本のこぎり音楽協会関西支部 10 周年記念特別企画として日本初のミュージカルソー・フェスティバルを大阪で開催。翌年、大阪文化における次代の担い手として咲くやこの花賞を受賞されました。

最初に授賞の連絡を受けた時は、意味がわからなかった。というのも、のこぎりフェスは開催しましたが、それまでソロ活動や自分名義での作曲はあんまりして来てなかったので。この賞をきっかけに「ちゃんとソロ活動せなあかん！」と作曲を始めて、「光のさすほうへ」という曲が生まれたり。ソロ活動を始めるきっかけになったので、ありがたかったですね（笑）。

まさに賞の有効性が証明された思いです（笑）。受賞者らによる翌年の演奏会では、ソリスト（のこぎり奏者）として大阪フィルハーモニー交響楽団との共演が実現しました。

当日は僕の曲を他の方にアレンジしてもらって演奏しました。その後、自分でもオーケストラの協奏曲や、ドラマ、映画の音楽スコアも書くようになって。独学で始めたので最初は指揮者、演奏家さんにもよく怒られました。「ここでちゃんとスラーの表記を入れとかな、クラリネットの人、吹きながら血だらけなるわ」とか。「この低音出すなら『バストロンボーン手当て』が別途必要です」とか。そうやって怒られながら、本には載ってないようなことを現場で学んで。クラシックや純粋音楽の人たちの中にも少しずつ仲間が出来てきた。それはすごい宝物でもあるし、やってて面白かったですね。

受賞から約 10 年を経て、近年はドラマ＆映画『妖怪人間ベム』、時代劇『銀二貫』、ドラマ『ど根性ガエル』などの映像の世界でもご活躍です。肩書きも音楽家、芸術監督と増えましたが、音楽に対する意識や接し方にも変化はありましたか？

めちゃめちゃ変わりましたね。僕は、チャップリンや藤山寛美さんじゃないですけど、基本的に芸術性だけじゃなく、どうしても「お客さんに楽しんで欲しい」で「笑かしたい」という思いが強かったんでね。例えば以前、腰を痛めた時にコンサートをしたことがあって。スタッフに両脇を抱えながらステージに登場するくらいひどかったのに、本番終わってから舞台を去るときにピアノの後ろに回って、「階段下りる」みたいなパントマイムして帰ったんですよ。「腰が痛いのに、笑かしたいんやな」と自分でも思って（笑）。そういう人間なので、どうしても音楽作るときに、その性分が足を引っ張る部分もあったんです。色んな方のコンサートを見ても思いましたもん。やっぱり音楽は絶対、しゃべらん方がお客さんに届く（笑）。やしきたかじんさん、上沼恵美子さん、さだまさしさんは独特かもしれませんが、しゃべればしゃべるほど音楽が届けへん（笑）。でもお客さんは喜んでくれるみたいな。今は、面白くてちゃんと感動で胸でいっぱいになる「音楽」を届けたい。集中するときはして、盛り上げるときは盛り上げる。そこはちゃんと別々に考えられるようになりました。大人になったなと思います（笑）。

やはり音楽や表現することへの興味は、幼少期からあったのですか？

小さい頃は、家でおやじがウクレレを弾いてたり。オカンは実験的に僕に音楽を刷り込もうと、１日中ずっと童謡のレコードをかけ続けていましたね。お陰でシンプルな童謡のメロディは、見事に体に入ってます。好きだったのは「黒ネコのタンゴ」「大きな古時計」とか、ちょっと哀愁を感じるもの。あと、幼稚園がキリスト系だったので、讃美歌のコード進行はいまだに影響を受けているなと思うくらい大好きです。ただ、その当時音楽の道へ進もうとは全く思わなかった。何となく中学時代から思ってたのは「男は 35 歳から」で、自分自身が仕事になる「サキタハヂメ業」をやるんだろうなと。まさかそれが、のこぎりだとは想像すらできてませんでしたけど（笑）。

高校卒業後は、大阪芸術大学・芸術学部芸術計画学科に進学されました。が、在学中は林幸治郎代表のちんどん通信社（現・東西屋）に入り浸りだったとか。

どっぷりでしたね。大学行くときも特にこれといった夢があったわけでもなく。決めきれずに、音楽、映像、文学、コンピューター、全部見て総合プロデューサーを作るみたいな計画学科にいきました。どれもちょっとずつかじるので何も手に職が残らないっていう（笑）。その頃はちんどん屋になりたかったんですよ。日本の古い懐メロとかが好きだったのでピンときて。日本の伝統芸能の中でもサーカス、パフォーマンス、音楽、宣伝とか色んな要素があるような気がして。実際に体験したらすごく面白かった。林さんの所にずっといるつもりではあったんですけど、このまま居たら親方を超えられへんなとも思って。大学卒業後は呉服屋へ就職しました。ちんどん屋の影響で日本の伝統やしきたり、祭りなどに興味が出始めたころだったので。

就職と同時期には、日本のこぎり音楽協会関西支部を立ち上げ、「はじめにきよし」のバンド活動も始められました。当時の職場での経験が、いまの活動に生かされていると感じる部分はありますか？

凄くあります。呉服屋って着物以外にも結納の飾りとか儀式用品も売っていて。その中に還暦に着るちゃんちゃんこがあったんですよ。カタログには赤色以外にも例えば 100 歳の白寿は白、古稀は紫とかいろんな色があって、そしたら当時大好きやった専務から「赤以外はワシらが考えたんや」と言われたんです。たまたま取引先の結納屋さんと話てて、「88 歳は米寿やからベージュ色でええやん（笑）」「ベージュはあんまりやから、日本の古い色で一番近いの金茶色、それにしましょ」で決まったと。え、ダジャレやん（笑）！しかも、当時の儀式用品のマナー本を見たら、「なぜ、88 歳は金茶色なのか。それは古来より～」と書いてあったんですよ。

そんなことがあったのですね！

だからなサキタくんと、専務が言うには「こういうものは、まずアーティストや商売人が考えて、それが続いていくと後から誰かがその意味を考えよんねん」と。全部が全部じゃないと思いますが、それって凄いことやなと、そこで学んで。最近、僕はのこぎり奏者として「木そのもの」に興味を持つようになって。本来なら捨てられるはずの「かんなくず」を使った祭りを今、河内長野で立ち上げようと思ってるんですよ。そこで、僕らの祭りもゆくゆくは「古来より～」となれへんかなとちょっと思ってて。名付けて”古来よりプロジェクト”。面白いでしょ（笑）。

衝撃的な面白さです（笑）。今秋、NHK の番組で取り上げられた「山を鳴らすプロジェクト」もその一環なのですね。お祭りはどんな内容ですか。

まず「山を鳴らすプロジェクト」では奥河内にある河内材を使って、新たな楽器を作ったり。祭りとしては、かんなくずで作った「かんなのはな」を幻の華と位置付けて、町のあちこちに咲かせていこうというもの。かんなくずで作った花飾りや衣装など、美しい木のマテリアルを身に付けた人たちが町を流して歩く。富山県の八尾（やつお）にある「おわら風の盆」祭りのように、女性が美しく見える祭りを作っていこうと考えていて。今年はプレ事業として、かんなのはなの妖精たちが森から町へ現れて、最後 は滝にもどっていくという 6 楽章からなる音楽劇『奥河内音絵巻 幻のまつり』を上演しました。台詞のない 1 時間ぐらいの作品なんですが、来年はもう少し笑いとかも取り入れて、ゆくゆくは NY で言うオフブロードウェイ作品のようになっていけへんかなと。のこぎりから色んなところに思いが派生して、思いもよらない所で別々のものが繋がったりする。僕はのこぎりは切るのではなく「つないでいく」感じがしています。

初めてのこぎり音楽に出合われたときは、「これだ！」というひらめきがあったのですか。

そうですね。20 年ぐらい前の大阪では、やっぱり横山ホットブラザーズさんの「お前は～アホか～♪」が有名で、のこぎりの音楽は人を笑かすもんやと思われていた。でも、ちんどん屋時代に出合った都家歌六師匠が弓で弾くのこぎりの音色に感動して。泣けるような哀愁ある音色を聴いた瞬間、人を笑かすための道具やと思っていたのこぎりが、こないに人の涙腺を震わせたりするんやと。「笑けるのに、泣けるなんてすごい！」と思いました。僕がのこぎり演奏を始めるきっかけとなった方ですね。

社会人生活が5年半を過ぎたころ、独立されました。

社会人生活の後半は、はじめにきよしのバンド活動も忙しくなりだした頃で。ある日、どうしても仕事帰りに名古屋でのライブが入ってしまった。当日、駅にロッカーがなかったため、営業先にまでギターを持って行かざるを得ない状況に陥ったことがあって、これは絶対にやったらアカンことやと。その頃、アメリカで開催されたのこぎりの世界大会「ミュージカルソーフェスティバル」で優勝（97 年、04 年大会で 2 度優勝）とかもしてたので僕が音楽活動をしていることは会社の人たちも知っていた。社長に「音楽でやっていきます」と伝えたたら、「せやろな、がんばりや」と言ってくれました。嬉しかったですね。僕としては当時からデザイナーとして働いていたウチの奥さんにしばらく甘えるつもりだったのに、気づいたら彼女も僕と一緒に寿退社

してた！！！（笑）。明日から俺らの生活どうなんねんと！　慌ててデモテープ持って、東京へ売り込みにいきました（笑）。

（笑）。とはいえ、音楽家としての船出は順調だったようですね。

当時 CM とかのバジェットも良くて、「東京ってすごいな！」と（笑）。でもなんか、東京にはクラ シックからメタルまで、どういうオーダーにも応じられますという職人のような人たちがいっぱいいて。しばらく行き来してるうちに、これって消費される音楽かもな、と。この先、機材もどんどん発展してもっと職人のような人は増えるやろうし、このままやったら生きていかれへん。やっぱり「これは絶対にサキタくんで」と言われるような仕事をしないと「サキタハヂメ業」にはなれへんなと思って。そこから東京に営業に行くのは止めました。しばらくはしんどい時期が続きましたね。

苦しい反面、ご自身の世界観を形作れるタイミングでもあったのでしょうね。

そうですね。その後、「これはサキタくんで」とだんだん言われるようになって、今に至る感じです。ありがたい話ですね。

「僕は最終的に、宇宙でのこぎりを弾きたいんですよ」（サキタ）

現在は河内長野に拠点を置かれていますね。

たまたま知り合いが河内長野市立文化会館のプロデューサーで、「かわちながの世界民族音楽祭」だ、「子供ミュージカル」だと言っては、演奏や作曲で声を掛けてくれて。小学校の校歌も作らせてもらいまし

た。体育館の歌詞プレートには、僕の名前が書かれています。河内長野には凄くご縁があって、いま家族で住んでますね。

河内長野の環境は、創作活動にも合っているとか。

特に良いのは、大阪の人に河内長野と言っても「どのへんやったけ？」とか言われる。あの、誰にも何とも思われてない感じというのが、ちょうどええというか（笑）。すごく透明やし、何でもできる。祭りの話にしても、周りからは「よくこんなことが出来ましたね」とか言われるんですけど、地元の人にこんなことやりたいねんと伝えたら「うん、やろやろ」と声が返ってくる。みんなニュートラルというかね。

今や芸術監督としての肩書きもお持ちですが、ご自身としてはあくまでも音楽家？

音楽家ですね。何でこんなに面白いものにちゃんと出合えたんだろうと思うくらい、音楽は楽しくて仕方がない。一番好きなのが鼻唄。何となく間違えてメロディを覚えてる鼻唄が一番好きですね。鼻唄や口笛もそうですが、ご機嫌な時にしか出て来ないじゃないですか。それって凄いよなと。作曲するときも鼻唄から作りますし。音楽って、アマチュアとかプロとか関係なく面白いなと思います。

サキタさんが思う一番”ご機嫌”な瞬間とは。

楽しくない時がないから、何て言っていいか分からないですけど。やっぱり、自分の作った曲で本当にお客さんが喜んだり、泣いたりしてくれた時は、届いてるんだなと思って一番嬉しいですね。今作ってるのが「めがねファンク」という曲で。「老眼鏡をつけるとこんなに見えるや！」という喜びを表現した曲です（笑）。日

常で思うハッとした瞬間を曲にするのが、今自分の中で流行ってて。ちゃんと自分ワールドを作っていける段階に入ったのかなと。面白いと思ったタイトルは携帯電話にブワーッとメモしています。

ちなみに、他にはどんなタイトルが？

「チビだけどなにか」「心臓に毛を生やそう」「忘れても大丈夫」「フィリピンのご家族」「坊主にならなくても」「髭」とか。全部、どんな曲？って思うじゃないですか。そんな想像もつかないようなものが自分の中から生まれてきたら面白いなと。映画やドラマ用ではなく、自分のサウンドトラックを作るような感じ。そんな考えで過ごしていると楽しいですね。

サキタさんが考える、「楽しく生きるコツ」を教えてください。

小さい頃がわりとそうだったんですけど、すべてを真に受けるとしんどくなるので、人の話を聞かない（笑）。今は必要ないと思ったら、ある程度で聞き流すというかね。あとは、何でも絶対に実現できないと思わないし、言わない。いま作っている「森のパイプオルガン」も、今年は目の前の鍵盤を弾くと 50 メートル先の木が鳴るところまで来ました。これを、ゆくゆくは山を一つ隔てた向こうの木を鳴らして、そこからフィンランドの山、スウェーデンで弾いたらカナダで鳴るみたいにまでしたくて。考え方としては、地球の森が同時に鳴らせるってことじゃないですか。今はネットで世界中と繋がれる時代やから、何かしらやり方がある。そんな話を A さんにしたら「そんなアホな。ナイトスクープに言え」となるけど、B さんは「おもろいな、それやってみよ！」、C さんは「それをニューヨークの大学のチームと一緒にやってみよう」と言ったりする。夢を実現するためのドアが一個じゃなかったりするから。ここがダメでも、こっちのドアを開いてみると先が繋がっている、みたいなことはよくありますね。

実際、今は宇宙関連のことにもコンタクトされているそうですね。

そうなんですよ。最終的に僕、宇宙でのこぎりを弾きたくて。種子島宇宙芸術祭があると聞いたので現地に駆けつけて、そこで JAXA や国立天文台の所長とか色んな方と繋がりました。でも、今は人工衛星も国家プロジェクトではなく、色んな大学が個々で飛ばしているそうですね。子供の本にも「大気圏のギリギリまで気球でカメラを飛ばそう」とか書いてあって、そんなことになってんの!?とびっくりしました。そうなったら、JAXA や NASA と繋がらなくても、やれることが増えるなと。やりたいことリストが増え続けて、えらいことになってます（笑）。

最後に改めて、今後の夢を聞かせてください。

今は自分のサウンドトラックかな。世界中のどこで演奏しても「そうやね、これはサキタくんの音楽やね」と言われるものを小さくても作る。そしてお客さんと共有する。意外とそこをやって来なかったなと思って。後は祭りを”古来より”のものにする（笑）。今の教科書では、聖徳太子はいなかったことになってるんでしょ？　かつて一万円札の柄にまでなった人が、実は存在していなかったとか。すごくないですか。その時は歴史が捏造されていた。むっちゃおもろいなと（笑）。今年河内長野で上演した音楽劇『奥河内音絵巻　幻のまつり』もじつは高野街道とか空海さんの話から着想しているんです。空海さんて伝説のオンパレードじゃないですか。ゼロから立ち上げるのは難しいけど、0.1 でも種があるならそこからビュッと伸びていく物語がある。歴史ってそうやって語り継がれてきたものやと思うから。現実に物語をのっけることで、時間を超えて続いていく。面白いことになっていきそうな気がしてますね。

音楽から、歴史問題にまでイマジネーションが広がりますね。

山村の葉っぱビジネスじゃないけど、かんなくずで髪飾りとか小物を作ることで、地元のおばあちゃんたちのちょっとしたバイトになれへんかな、産業にできたらいいなとか。一つのことからパッと色んなことを思い浮かべてしまう。何かと何かを掛け合わせて、新しく面白がれることを発見するのが大好きだったりするので。そういう趣味というか、もはや病気です（笑）。

★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】

……今聞かれたら「かんなくず」ですね。究極の”ほるもん（捨てられるもの）”ですが、折ったり貼ったり花にしたり広がりだした。美しいかんなくずは、日本の職人さんにしか作れない。先日、かんな削りの技を競う「削ろう会」を観に行ったんですが、1000 分の 1 ミリの薄さを競い合っていて、ホンマにすごい職人さんが削ると、削った木の表面が手に吸い付く。かっこええな～と。そんな職人さんですら、この先 10 年でどんどん職がなくなっていくという話もあるのです。かんなくずで作った美しいモノを大阪の新たな名物に出来ないかな。大阪の人って新しいものを作るより、日常にあるものに新しい価値を見つけて、アートや産業に繋げるのが得意だと思うので。“木を使って善き事を成し遂げよう！”というよりは、“どんどん面白がって”行くつもりです。